

萬野プロデュース・都立玉川高校公演台本

ホーム・スイート・ホーム

作・演出 萬野展

人物

広中寛子 三十七歳。医者。（伊藤貴子）

広中理江 十七歳。高校生。（石田愛）

深雪 十七歳。理江の幼なじみ。（青木恵子）

中村くん 十八歳。家出少年。（入月謙一）

丸橋 二十七歳。寛子の同僚。（早矢仕裕之）

夏目 三十五歳。探偵。（一村宏幸）

【注記】この台本は、九十六年に都立三田高校において初演されたものに、若干の修正をくわえ、九十八年に都立玉川高校で再演された。

1 プロローグ／ある朝

広中家。ジタバタと外出の用意をしている母、寛子。娘、理江登場。起きたばかりのような格好をしている。

理江 …。(ポーツとして) なにしてんの？

寛子 おはよう。朝御飯できてるわよ。

理江 んん…いらぬ。

寛子 食べときなさいよ、今日忙しいんだから。

理江 …。(ポーツとして)

寛子 …ちよっとアンタ聞いてんの？ 聞こえた？

理江 なに？

寛子 忙しいのよ、今日は。

理江 なんて？

寛子 なんてって、あんた忘れたの？ きょうおじいちゃんの家行くのよ。言ったでしよ。言ったわよね？

理江 そうだっけ？

寛子 だからね、いろいろやることあるんだから、あんたに手伝ってもらわなきゃどうしようもないんだから。御飯いらぬなら早く着替えて支度してちよっだい。

理江 …うん。

理江、立ち尽くしている。

寛子 …なにやってんのよ。

理江 ん？

寛子 着替えて支度してって言うてんのよ。

理江、黙って行きかけて、

理江 …あれ…おじいちゃん死んだんじゃなかったっけ？

寛子 亡くなったって言いなさいよね…。そつよ。お葬式だってやったでしよ。ちよっとしっかりしてよね。起きてる？

理江 …んー。

寛子 だからね、おじいちゃんの家を全部片づけなきゃいけないの。それやるのあたしたちしかいないんだから。

理江 んー。

寛子 だからわかったら、早く、支度して。

理江 …うん。

理江、ふらふらと退場。

寛子 (ひとりでブツブツ)…まったく、なにもこの忙しい時にポックリ行かなくなつていいのこ。

舞台外から男の声。

男の声 ピンコーン。

寛子 …。
 男の声 キンコーン。カンコーン。(とかなんとか、よくありがたなドアチャイムを真似る)

寛子、舞台袖へ。

寛子 ハイ？

男の声 あー、どうも朝早くにすみません。朝非新聞です。

寛子 うちが読瓜。

男の声 あ、イヤイヤ、そうじゃないんです。えーと広中、寛子さんですよ？ 漆原

総合病院にお勤めの。

寛子 …。ハイ。

男の声 あ、どうもおはようございます。朝非新聞です。

寛子 だからウチは読瓜。

男の声 イヤ、そうじゃなくて、えー、社会部です。

寛子 は？

男の声 つまり、えー、取材というわけでした。

寛子 …。

寛子、ドアを開ける。(舞台外)

男、登場。(いかにも新聞記者らしい格好) 名刺を出す。

男 すいません、突然お邪魔しちゃって。ええと、広中先生…。

寛子 …。そうです。

男 ああ。このたびは、大変ご愁傷さまでした。

寛子 …。

男 …。広中先生は、えー、先日亡くなられた漆原先生の…。

寛子 孫です。

男 どうもとんだことでした。漆原博士の突然のご逝去はわが国の医学界にとってま

ことに大きな損失…

寛子 なんて口で言うの。

男 は。

寛子 チャイム押せばいいでしょ。なんで口でいうの。

男 は、イヤ、エー

寛子 (名刺を見て) 夏目、さん？

男(夏目) ハイ。

寛子 祖父のことで取材に来た記者なんてあなたがはじめてよ。何が聞きたいの。

夏目 さぞかしお寂しいでしょう。

寛子 あなた、ホントに新聞記者？

夏目 もちろん。

寛子 それじゃ知ってるでしょ。あの人は研究一筋、親族とは絶縁状態、あたしでさえ

死ぬ直前まで半年近くも顔見てなかったのよ。

夏目 一生を医学に捧げられた方でした。

寛子 そうね。

夏目 人望もあつく、ご自分が創設された病院を有数の大病院に育て、引退された後も影に日向に後継者たちを支え…

寛子 言っときますけどね夏目さん。

夏目 ハイハイ。

寛子 あたしは後継者争いのゴタゴタにはまったく関係ありませんからね。

夏目 あー。

寛子 あの人、あたしがこの仕事につくのにも最後まで反対してたくらいよ。

夏目 はあー、高潔な方だったんですね。

寛子 異常なくらいにね。それは周囲もわかっているはずよ。だからね夏目さん、ご老公のニラミが消えてどんなゴタゴタが持ち上がるって、あたしは無関係、カヤの外よ。わかった？

夏目 やはりひと当てありますか。

寛子 これ以上はノーコメントよ。あたしもあの病院の一員ですからね。もういい？

夏目 新聞、お読みになりました？

寛子 なに？

夏目 朝刊ご覧になりました？

寛子 (首を横に振る)

夏目 つい昨日、踏み切り事故がありましたね、ブレーキの故障で踏み切りに突っ込んだんです。そこへ電車がこう、まあタイミング良く…良くはないですが、こう横から、ドーン…そのまま百メートル引きずっていきましてね…あ、ご存じない？昨夜、テレビで散々やってましたが…

寛子 何の話？ どういう関係があるの？

夏目 この近くなんですよ、その踏み切り。

寛子 昨日は一回もテレビつけなかったわ。ウチ、娘が見ないとテレビって見ないから…。それが、なにか？

夏目 いやあ、場所が近かったもんですから、ふと思いついて…イヤどつち、お忙しいところ、突然お邪魔しました。

寛子 どつち。

夏目 …(行きかけて)あの、壊れてるんです。

寛子 なに？

夏目 チャイム、壊れてますよ。

寛子 …。

夏目 じゃ、どつち。

夏目、退場。

寛子 …。

寛子、チャイムを押してみるが、確かに鳴らない。

寛子 …。何しに来たのよ、まったく…

理江、出てくる。ぜんぜん変わってない。

理江 …おかあさん、あたしのムースしらない？

寛子 あんた、まだそんなカッコしてんの？ ちょっと、さっさとしなさいよ。もう出る時間なんだから！

理江 どこ行くんだっけ？

寛子 だからおじいちゃんの家だっけって言うてるでしょ！

理江 ああ……でもさ、おじいちゃんて……

寛子 死んだのよ！ そう、死んだの……肝硬変で大往生……！ アンタのその人間離れした低血圧どうにかなんないの？

理江 へへへ……

寛子 そこは照れるとこじゃない……いいからもう、さっさと着替えてちょうだい。

理江 （行きかけて）なに着ていけばいいかな。

寛子 汚れてもいい格好にして。おじいちゃんち、アンタもう覚えてないだらうけど、建ってるのが不思議なくらい、もう、ボロボロで汚いんだから。

理江 掃除するの？

寛子 そうね、場合によってはね。とにかくおじいちゃんのを整理して、いらぬものは捨てて、取り壊す前に家を空にしなげや。

理江 取り壊すの？ どうして？

寛子 更地にして売りに出すからよ。

理江 売るのが？ どうして？

寛子 どうしてって、アンタ、おじいちゃんの身寄りはおたしたち親子しかいないんだから、あの土地、おたしたちのものになっちゃうでしょ。

理江 ……いいじゃん。

寛子 いくくないの。あんなダダッ広い土地なんか相続したら、税金いくらとられると思ってるの？ 払えっこないわよ。だから売るのがよ。

理江 仕方ないね……

寛子 そう、仕方ないの。…支度して。タクシー呼ぶわ。

理江 ん。

寛子 あなたのムース、風呂場で見たわよ。

理江 ん。

寛子 理江。

理江 ん？

寛子 あんた、おじいちゃんのこと好きだった？

理江 ……うん、好きだったよ。

寛子 そう。…あたしもよ。…着替えて。

理江 ……うん。

理江、退場。
寛子、残って一息つき、電話をかけに行く。退場。

2
ヘイ！ タクシー（着替えタイム）

夏目、走って登場。

広中親子がタクシーで走り去るのを目で追っている。

（実際には親子は出ていない）

タクシーを止め、乗り込む。

夏目 前のタクシー追っかけて。そう、あの黄色い帝都無線……。今親子連れ乗せたの、見てたでしょ。…え、いや違う違う…。刑事じゃないよ…そんなに下品に見えるかね…

言いながら、とんとん脱いでいく。

夏目 え、まあ、ちょっと着替えタイム…ごめん、大目に見て…あ、ちょっと、見失わないでよ、頼むよ…うん、右曲った、右…オッケー、しっかり頼むよ…

スーツ姿に着替えていく夏目。

夏目 …運転手さん、いつもこのあたり流してんの？…昨日の事故知ってる？…そうそう、踏み切りの…え、え、え…これ？（車、踏み切りを通り過ぎる。夏目、振り返って見ている）…今の？…あの踏み切り？…へえー、そう、怖いねえ…だけど、あれだね、かたづけちゃうもんだね、一日で…へえー…ん？…死んだの？…そりゃ死ぬよ、百メートルから引き擦られちゃあさア…うん、まあ、まあ、即死でしょ…それがさ、身元わかんないだってねえ…

タクシー、スピードをゆるめる

夏目 ん、止まった？…あ、こつちも止めて、ここでいい…うん（支払いのためポケットを探りながら、車のフロント越しに覗き込んでいる）…いやあ、こりやずいぶん古いお屋敷だあ…ん？…ハハ、そうね、こんなの子どものころよくあったね、町はずれに必ずあるんだよね、お化け屋敷みたいなね…ハイ、じゃあこれね、釣りはいいいよ（札を渡す）…ん？…あ、ちよつど…ちよつどね…うん、じゃあまあ、うん、（追加で札を出そうか迷うが結局渡す）これ…少ないけど…と…いやいやいいって…気持ち気持ち…どうもね、ありがとう（降りかける）（商売うまいね）。

夏目、タクシーから降りる

屋敷の方の様子をつかがいつつ、退場

3
母娘到着／輪唱／黒い人

おじいちゃんの家。
暗く湿った空気。
寛子と理江登場。

理江　ねえ、なんで電気つかないの？

寛子　電気とまってるのかしら…。ずっと使ってなかったから…

理江　だっておじいちゃん住んでたんじゃないの？

寛子　最近はおラ、病院の近くのマンションにずっといたでしょ。こっちはほったらかしだったみたいね。

理江　あたしこついうのの苦手…

寛子　あんた子どものころから臆病だったわよね。

理江　おじいちゃんちって、こんなお化け屋敷みたいだった？

寛子　もう覚えてないでしょ。あんた幼稚園のころここに住んでたのよ。一年だけね。

理江　ゼンゼン覚えてない。

寛子　でしようね。

理江　ねえ、こんな広いとこ二人だけで掃除するの？

寛子　そうよ。だから言ったでしょ。

理江　信じられない…。

寛子　とにかく電気つかなきゃ仕事になんないわねえ。ちよつとアンタここにいてね。

理江　ど、どこいくの？

寛子　電気のもと探してくる。ヒューズ飛んでるだけかもしれないわ。

理江　ちよ、ちよつと待ってよお…

寛子　あんた暗いとキーキー騒ぐんだから、そこにいなさい。すぐ戻ってくるから。

理江　だって…

寛子　迷子の心得その一。やたら動かさず一個所で迎えを待つこと。わかった？

理江　待ってよ、ねえ！

寛子　歌でも歌ってなさい。じゃ、ごきげんよう。

寛子、退場。

理江、ぼつんと残る。

理江　ヒー…

理江、黙っているのが恐くて声を出している
シーンとした中に、かすかに物音が聞こえてくる
遠くで鳴っている音楽のようだ

理江　…(物音にビクつく)(ワー、アー、エヘン、ンンンン)(咳払い)

理江、唄い出す。

理江　…(唄)毎日、まいにち、ぼくらのは Teppan の…

腕を振って真剣に唄う理江。

理江　うーえーで、焼かれて、いやにナッチャウナー…

厭になっちゃうタイヤキくんに感情移入し過ぎて暗くなってしまう。

理江 ……選曲ミス。…ええと、ええと……ある日、森のなか、くまさんにー、出
ああった…(調子が出てくる。元氣よく)花咲くもーりーのみーちー、チャン
チャンチャンチャン、くまさんにーでーあーあーたー！

後ろの物陰に男(夏目)が登場しているが、理江は気づかない

理江 くまさんーのっ

夏目 ……くまさんの(小声で輪唱)

理江 ゆーこーとーにやっ

夏目 ……ゆーこーとーにや

理江 (気づく)…おじよおーさん…

夏目 おじよおーさん

理江 …おにげーなーさい…

夏目 おにげーなーさい。

理江 …。

理江、立ち上がってぎくしゃくと歩き出す。
手と足が同時に出ている。
振り返る勇氣はない。

理江 ……すたこーらー…さっさっさーの……さー…

夏目 ……チャンチャンチャンチャン。

理江 ……！

理江、恐怖のあまりその場に失神。

夏目、物陰から現れ、理江の様子を見る。

夏目、退場。

一回軽く暗転かけて理江ハケ。

寛子、懐中電灯をかざして登場。

寛子 ……おかしいわね。確かこのへんに電気の元栓があったと思っただけど…

もうひとつ別の懐中電灯の光。

寛子 ……誰？…理江？

懐中電灯の光が止まる。

寛子の懐中電灯が男を照らす。

全身黒づくめで、覆面までしている男がチラリと見える。

寛子 誰！ 誰なの！……何で…

男、逃げ出す。

寛子 あ、ちょっと待ちなさい！……

寛子、男の消えた方に退場。
暗転。

4
深雪

暗転あけ。理江、さっきのところに倒れている。
そのそばに女の子（深雪）が覗き込んでいる。
理江、気づく。

深雪 理江ちゃん。理江ちゃん。

理江 ん〜……（超低血圧モードに入っている）

深雪 気がついた？

理江 ……ん〜……

深雪 だいじょぶ？

理江 ……ん〜……

深雪 しつかりしなさいよね。

理江 ……（フラフラと立ち上がる）……

深雪 ……ちよつと、だいじょぶなの？

理江 ……（ボーツとしている）

深雪 ちよつと理江ちゃん。理江ちゃんてば。

理江 ……ん〜……

深雪 しつかりしなさいってば。

理江 ……歯磨きたい……

深雪 何言ってるの？

理江 ……ん〜……

深雪 あんたが昔住んでた家でしょ。

理江 あんた、誰……

深雪 わかんない？ わかんないよね、そりゃ。深雪よ。覚えてる？

理江 ……へー！

深雪 へーってアンタわかってんの？

理江 ……へへへ……

深雪 何照れてんのよ。

理江 ……

深雪 理江ちゃん。

理江 ……（徐々に理性を取り戻しつつある）

深雪 しつかりして。

理江 おかあさん！ おかあさんは？ あんた誰？ ……どこで何してるの？ そうだ、く

まさん！ くまさんよ！ くまさんは？

深雪 なに、なによ、ちよつと、ちよつと落ち着きなさいよ。

理江 だから、輪唱で……あたしが歌うと歌うのよ！ だから……つまり、チャンチャン

チャンチャンで……！

深雪 だから落ち着いて、落ち着いて話しなさいよ！

理江 ……

深雪 ……深呼吸。深呼吸！

理江 ……（スーハー）

深雪 落ち着いた？

理江 (首を横に振る) ……(何かを言いかける)
 深雪 待った! ……ちよっとあんた黙って! ……いい? あたしの質問に答えて。

理江 ……(うなづく)

深雪 あなたの名前は広中理江。オーケー?

理江 ……(うなづく)

深雪 あなたは幼稚園のころ、ここに一年だけ住んでいた。オーケー?

理江 ……(うなづく)

深雪 あなたは幼稚園のころ、一番の仲良しだった深雪っていう子のハーモニカを壊したことがある。オーケー?

理江 ……(思い出して、うなづく)

深雪 ……(理江の顔を覗き込んでいる)

理江 ……(しげしげと相手の顔を見返す) 深雪ちゃん? あんたミーちゃんなの?

深雪 そうよ。思い出した?

理江 うわあ久しぶりー!

深雪 理江ちゃん変わってないわゼンゼン!

理江 あんたずいぶん背が伸びたのね!

深雪 あんた相変わらずチビね!

二人、手を取り合って懐かしがる。

理江 ミーちゃん、どうしてこんなところにいるの?

深雪 うん、ちよっとね、音楽聞いてたの。

理江 音楽?

深雪 ここね、ずっと人住んでないみたいじゃない。あたし、ひとりになりたい時いつも来てんの。誰もこないし、静かだし。そしたらびっくりしたわよ。なんか音がして、きてみたら、あんた倒れてるじゃない。

理江 ……

深雪 どしたの?

理江 あたし以外に誰がいなかった?

深雪 ……。ううん。

理江 夢だったのかな…。

深雪 ねえ、掃除しに来たの?

理江 うん、おじいちゃんが死んで、それでこの家の掃除に…ねえ! こんなことしてる場合じゃないのよ。おかあさんが戻ってこないの。

深雪 ねえ、それってもしかして…

理江 なに?

深雪 これ?

深雪、ポケットから手ぬぐいを出す。

理江 これ…。

深雪 拾ったの。

理江 ……おかあさんのだわ…。どこにあったの、これ。

深雪 あっちに階段があつて、そのそば。

理江 階段…階段で、だってこの家、一階建てじゃない。

深雪 そんなの知ってるわよ。

理江 なんて階段があんのよ。

深雪 降りる階段よ。

理江 ……降りる……って……どういうこと？

深雪 地下があるのよ。

理江 ウソ。あたし知らないよそんなの。

深雪 だってあんた住んでたんでしょ。覚えてないの？

理江 でも……だって……

深雪 探しにいかなきや。ね。早く。

理江 だって、ちょっと待ってよ。

深雪 早く！ 行こう！

二人退場

5 丸橋くんと寛子さん1

黒づくめの男、走って登場。
行く手を壁にふさがれる。
寛子、追って登場。

寛子 ……お待ち！

黒い人 ……（逃げ道を求めてキョロキョロ）

寛子 もう逃げられないわよ。なに？ なんなの？ 泥棒？

黒い人 ……（違う違うと首振り）

寛子 じゃあ何よ。

黒い人 ……（何でしよう、という首かしげ）

寛子 なんとか言いなさいよ。あなた、口聞けないの？

黒い人 ……（小さなメモ帳を取り出して書く）

寛子 ……（メモを受け取る）（なんなのよ…）（読む）「怪しいものではありません」「…」。

（改めて相手をしげしげと見る）

黒い人 ……（どう見ても怪しい）

寛子 ……（あなたバカにしてんの？）（メモを投げる）

黒い人 ……（次のメモを書く）

寛子 だからなんなのよアンタ…（メモを受け取る。読む）「うるしはらはかせのひみ

つ」…あなた…うるしはらはかせの漢字で書いたら？」

黒い人 ……（照れる）

寛子 照れない！…どういうこと？ あなた、何者？ 顔くらい見せたら？」

黒い人 ……

寛子 怪しいものじゃないんだったら顔見せてもいいでしょう。

黒い人 ……

寛子 なんか、事情があるのね。

黒い人（うなづき）

寛子 ホントに泥棒じゃないのね。

黒い人（うなづき）

寛子 声くらい出さない。

黒い人 ……（迷っているが、思いきってしゃべる）…あるものを、急いで探さないとい

けないんです。（カン高い声）

寛子 ……

黒い人 あるものとは、漆原先生がこの屋敷に保管したもので、急いでそれを探し出さ

ないと大変なことになるんです。私は決して怪しいものではありません。どうか

協力してください。

寛子 ……あなた、普通の声でしゃべれないの？

黒い人 うーん…。

寛子 あるものって何？

黒い人 ……それは…。

寛子 大変なことって、なにがどうなるの？

黒い人 …。それは、えー、とても大変な…

寛子 それを探してどうするの？

黒い人 …。んー…

寛子 あんた、病院の人ね。

黒い人 (動揺)

寛子 だからあたしに顔を見せられないんでしょう。あたしと普段顔をあわせてるから。違う？

黒い人 …(さらに動揺)

寛子 まあ、いいわ。それで、どうするの？

黒い人 …下へ。

寛子 下？ まだ下があるの？

黒い人 報告では、この屋敷の一番下に隠されているらしいんです。

寛子 報告？ 報告ってなによ？

黒い人 いや、えー、興信所の…ですね。

寛子 興信所？

黒い人 …とにかく、いきましょ。

寛子 わかったわ。いきましょ。…でも言っときますけどね、この家のものを勝手に持ち出そうなんて思わないでね。その秘密のなんとかが見つかったら、まずあたしが調べさせてもらいますから。いい。

黒い人 …(困っている)

寛子 どうなの！

黒い人 (勢いに押されて、オーケーのサイン)

寛子 いきましょ。

二人、退場。

6 中村くん

暗い部屋。隅の方に少年がうずくまっている。
恐る恐る入ってくる、理江と深雪。

深雪 ね…地下があるでしょ？…ホントに覚えてないの？

理江 ……知らなかった。

深雪 なんかこう怪しい雰囲気っていつかさ、こーゆーのちよつとドキドキするね…。

理江 今日だけでもう八年分くらいドキドキしたわよ。もうたくさんだわ。

深雪、理江から離れてキョロキョロしている。

理江 ……深雪ちゃん！ 深雪ちゃん！ 深雪！

深雪 な、なによ、大声ださないでよ。(戻ってくる)

理江 離れちやいや。

深雪 あんたしばらく見ないうちに臆病ものに成り下がったわね。

理江 うるさいわね。人は誰でも苦手なものがあるでしょ。

ごく小さなもの音。

ふたり、息を呑んで凍りつく。

理江・深雪 ……。

理江 聞こえた？

深雪 ……(頷く)

理江 気のせい？

深雪 ……(首を横にふる)

理江 後ろ？

深雪 ……(頷く)

理江 見る？

深雪 ……(首をかしげる)

理江 ……。

ふたり、決心してゆっくり振り向く。

二人の懐中電灯の光が、少年の顔に当たる。

理江・深雪 ギャーッ！ イヤーッ！ キャーッ！ ダメーッ！

とかなんとか、大騒ぎする二人。

少年 ギャーッ！ オリヤーッ！ ドオリヤーッ！

とかなんとか、なぜかいつしよになつて騒ぐ。

向き合つて構え、にらみ合う理江と少年。

理江 あああああんた誰よ！

少年 え。

深雪 キャーッ！ ウワーッ！ ダーッ！ (とか何とかひとりで騒いでいる)

理江 あんた誰！

少年 え。

深雪 アーレー！ 痛い痛い痛い痛いッ！ 返して〜ッ！ 早くして〜ッ！（とかなんとか）

理江 うるさいわねッ！

深雪 …（やっとな黙る）

理江 アンタたいして驚いてないのにワザと騒いでるでしょ。

深雪 …（プルプルと首を振る）

理江 あんた誰！

少年 いや、誰っていわれても…

深雪 あ、関西弁。

理江 ここで何してんの！

少年 …あんたは誰？

深雪 あ、ホラ関西弁。ね？

理江 アタシ…アタシはこの家の親戚よ。そんなことよりアンタは誰よ！

深雪 関西の人だよ、関西弁だもん。

理江 わかったわよ！ ちょっと黙ってなさいよ！

少年 僕ここに住んでるんですけど…。

理江 住んでるってどういうことよ。

少年 どういうことって、住んでるってことですけど。

理江 だからどういうことよ！

少年 どういうことって、つまり、住んでいる、ってことですけど…

理江 だからそれはどういふことなのよ！

深雪 …やめてエーッ！

理江 …。。（びっくり仰天）

少年 …。

深雪 …（頭を押さえて苦悩している）…やめてッ…。

理江 …な、なによ…どうしたのよ…。

深雪 …みず…

理江 ハ？

深雪 …水かけ論…やめてッ

理江 …何言ってるの？

深雪 …かけないで…帰ってきて…

理江 …?????（やっぱりわからない）

少年 …大丈夫ですか？

深雪 …ありがとうございます。

少年 もう、水かけ論はやめますから。

深雪 建設的にね…。

少年 ハイ。

深雪 …前向きに。

少年 ハイ。

深雪 グッドラック。（もとの体勢に戻る）

少年 …（理江に）…そういうコトでいいですか？

理江 （呆然としているが我に返る）よくないわよ。いいわけないでしょ。

少年 でも…ずっと前から住んでるし…

理江 だって、じゃあ、おじいちゃんはおじいちゃん、アタタのこと知ってたの？

少年 おじいちゃんて？

理江 おじいちゃんはおじいちゃんよ。

少年 誰の？

理江 おじいちゃんっていったらおじいちゃんよ。

少年 だから誰の？

理江 あたしのよ！…あたしのお母さんのおじいちゃんだからあたしから見たらホントはひいおじいちゃんだけどおじいちゃんだったからおじいちゃんていいのよ！

深雪 …うー…(悲しげに唸る)

少年 あ。

理江 なんなのよ。

少年 きつと水かけ論の気配を感じたんですよ。

深雪 うー。(そつたといつ唸り)

少年 前向きに行きまじょう。

深雪 うー。(そつそつ)

理江 …あんたしばらく見ないうちにヘンなノリ身につけたわね…。

少年 アノ。

理江 なに。

少年 いつまでこうしてます？

理江 なにが。

少年 この体勢、つらくないですか？

理江 …だって油断できないもん。

少年 おたがい少し歩み寄るっていつか、緊張緩和しませんか？

理江 …(疑わしそうに見ている)

少年 徐々にでいいんですけど。

理江 …。

… 三人、膝だけ伸ばす。

一同 …。

… 構えた手を下ろす。

座る。

理江 …それで？

少年 …。えーと…ナカムラです。

理江 何よそれ。

少年 ナカムラです。

理江 何か。

少年 ボクが。

理江 あんたナカムラっていうの。

少年 はい。…あの、あなたは。

理江 … 広中理江。
少年 あ。(頭を下げる)
深雪 あたし、深雪。
少年(中村) あ、どうも。よろしく。…あの、お友達なんですか？
深雪 幼なじみなの。幼稚園の頃ね、一番の仲良しだったのよね。
中村 あ、そつなんですか。
深雪 でも理江ちゃん引越していつちゃって、それっきり。
中村 じゃあ、今日は久しぶりに再会したわけですか。
深雪 そつなのよ。もつびつくりよね。理江ちゃんてホント変わってないんだもん。
中村 今いくつなんですか？
深雪 十七よ。あなたいくつなの？
中村 僕、いくつに見えます？
深雪 うーん…。何か年齢不祥って感じだなあ…。
中村 えー、そつですかあ？
深雪 うん、ねえ、いくつに見える？
理江 …。
深雪 どうかした？
理江 なにナゴヤカなフニキになってんのよ。
中村 …。
理江 合コンやってんじゃないんだからね！(中村に)ちゃんと説明して。
中村 …十八です。
理江 歳なんて聞いてないわよ。
中村 いや、一応…あの、あなた、ええと広中さんは、ホントにこの家の人なんですか？
理江 そつよ。おじいちゃんちよ。
中村 そつですか。実はあんまり言いたくないんですけど…、一年前に僕の両親が失踪しました…。
理江 はあ？
中村 ええ、それですね、マア、あんまり人に言えないような事情もあって、姿を隠さざるをえないような状況になったと思ってください。
深雪 それって、夜逃げ…？
中村 マアそんなようなもんです。…で、その際にボクがいると、こつ足手まといつていうか、逃げにくいつていうか、それでいったん別れようということになりました…。
理江 …それとどうしてここにいるのよ。
中村 別れる時に母親が、ある住所を書いたメモと、それから手紙を持たせてくれました。この住所を探し当てて、それでそこに住んでいる漆原つていう人に、この手紙を見せろつて言つんです。面倒を見てくれるはずだからつて…。
理江 …。(中村の顔をまじまじと見る)
深雪 なに？
理江 漆原つて…あたしのおじいちゃんの名前…
中村 そつらしいですね。ところが、やつてきてみると誰もいなくて…他に行くあてもないし、それでとりあえずこつで暮らしていたわけです。

深雪　こんなところで、ずっとひとりで？　よく寂しくないわねえ。

中村　子どものころから、こつこつ生活に慣れてるんですよ。よく、水道も電気もないところで暮らしたりしましたから…

深雪　へえー。…でもさ、食べ物とかどうしてたの。

中村　両親と別れるとき、いくらかお金を持たせてくれたんで、それで時々夜中にコンビニとかで…ここ、冷蔵庫もあるし…で、話しをもとに戻すとですね、その、漆原さんという人…

深雪　それって、理江ちゃんのおじいちゃんだったんだよね。どついつ関係だったのかしらね。

中村　ええ、それがですね、僕の、えー、どうもお父さんだったらしいんですよ。

深雪　…え。

理江　…(何のことかわからない)…なに？　なんのこと？　どついつのこと？

中村　だからですね…そうなんです。

深雪　だって、さつき両親が失踪したって言わなかった？

中村　再婚です。母親の連れ子なんです。それまではまあ、未婚の母っていうんですか…。で、ホントの父親ってというのが、漆原っていう偉いお医者さんだって聞いたことがあります…

深雪　えーと、ていつことは、理江ちゃんのおじいちゃんのこと…じゃなくて…ホントは理江ちゃんのお母さんのおじいちゃん、その子どもだから…えー、理江ちゃんのこと…なに？

理江　…え。(呆然としている)

深雪　あんたショックからの立ち直りが遅いわね。

中村　無理もないですよ。ええと、大叔父、っていうんですか、そついつの。

深雪　つまり、えー、理江ちゃんの叔父さんではなくて、理江ちゃんのお母さんの叔父さんってことよね。

中村　あ、じゃあ、さつきの、やっぱり…

深雪　さつきのって？

中村　さつき、女の人がきて、黒装束の怪しげな奴といっしょに…

深雪　ホント？　それで？

中村　下へ行きましたよ。

深雪　下？　まだ下があるの？　ちよつと理江ちゃん聞いた？　聞いてる？

理江　え。

中村　よく話は聞き取れなかったんですけど、こんな紙切れが落ちてました。

深雪　…(受け取って読む)「怪しいものではありません」…なにこれ、めっちゃめっちゃ怪しくない？

中村　僕もそう思います。

深雪　下って、あなた行ったことあるの？

中村　いや、僕はないですけど、階段のある場所なら知ってます。

深雪　行こつ！　理江！　お母さん下行ったって！

理江　え？

深雪　ちよつと、シャンとしなさいよ。お母さんを探すんですよ！…ねえ、案内してくれる？

中村 え、僕がですか。…わかりました。僕も彼女のお母さんに会って、話してみたいし…

深雪、中村、立って行きかける

深雪 よし。いこ。ホラ、理江。

理江 …。んー。歯磨きたい…。

深雪 いいから来なさい。

中村、先導して退場

深雪、理江を引っ張って退場

7 丸橋くんと寛子さん2

黒い人、登場。
続いて、寛子登場。

寛子 ……驚いたわね、こんなところがあったなんて…。もう二階分降りたわけだから…
地下二階ってこと？

黒い人 (同意の声)

寛子 暗くて入り組んで、まるで迷路だわ、これじゃ…。

黒い人 (同意の声)

寛子 あんたね、シヨツカーの戦闘員じゃないんだから、いいかげんにそれやめたら…

黒い人 ……

寛子 なによ。…シヨツカーの戦闘員知らないの？

黒い人 ……(申し訳なさそつ)

寛子 悪かったわね、どうせアタシはおばさんよ。

黒い人 (とんでもない、という感じ)

寛子 いいけどね…。ねえ、その秘密のナントカっていうの、それいったい何なの？

黒い人 ……

寛子 どんなものなのかくらい教えてくれなきゃ、アタシだって探しようがないじゃない。い。そつでしょ？

黒い人 ……

寛子 教えなさいよ、そのくらい。…ケチケチしないで。…ね？

黒い人 ノートです。

寛子 ノート？

黒い人 はい。

寛子 何が書いてあるわけ？

黒い人 (さんざん迷って) えー、んー…字。

寛子 殴るわよ。

黒い人 ……殴つてから言わないでください。

寛子 字って何よ、字って。当たり前でしょ。イライラするわね。

黒い人 すいません。

寛子 じゃあ誰が書いたノートなの？

黒い人 (再び困る)……うーん、えー…

寛子 誰！

黒い人 ……えー…人間…かな。

寛子 殴るわよっ。

黒い人 だから殴ってから言わないでくださいよ…寛子先生…(はッと気づいて口を閉ざす)

寛子 ヒロコセンセイ？

黒い人 ……

寛子 いつもそう？

黒い人 ……

寛子 あたしが病院でこうやってポンポン殴る相手と言えば…

寛子、思い出しつつ、指を折って数えはじめる
一人、二人、三人、四人、五人、間、六人、七人……

黒い人（たまりかねて）ずいぶんいますね…（地声）。

寛子 あっ、その声。

黒い人 ……。

寛子、スキをついて男の帽子をさっと奪う

黒い人 あっ。

寛子 あーっ、その金髪！ 丸橋！ あんた、丸橋君でしょ！

黒い人、観念して覆面をとる。

黒い人（丸橋）…どうも。

寛子 あんただったの！

丸橋 すいませんでした。寛子先生をだますつもりじゃなかったんです…。

寛子 どういうこと？ なんてあなたがこんなことしてんの？

丸橋 ……その、頼まれて…

寛子 頼まれたって、誰に？

丸橋 ……。

寛子 丸橋君。

丸橋 ハイ！

寛子 あんたがインターンの時、さんざん世話してやったのは誰？

丸橋 寛子先生です。

寛子 あんたがウチに入ってからやらかしてきた数々のミスの尻拭いしたのは誰？

丸橋 寛子先生です。

寛子 しゃべってしまいなさい。

丸橋 ……。外科部長に頼まれたんです。

寛子 ……外科部長？ あのチビハゲ？

丸橋 チビハゲです。

寛子 どういうこと？

丸橋 寛子先生、今、病院で、いろいろ探めてること、ご存知ですよ…。

寛子 次期院長のことでしょ。とんだお家騒動ね。

丸橋 本命、誰だか知ってます？

寛子 いくらアタシが疎いからって、それくらい知ってるわよ。医局長でしょ。まあ、妥当なセンなんじゃないの？ キャリアは充分だし、毛並みもまあいいし。

丸橋 外科部長はそう思っていないんです。

寛子 ……（察しがついてきた感じで、マジな顔になっている）全部話しなさい。

丸橋 そのノートには、本命をひっくり返すようなことが書かれています。表沙汰になれば大変なスキャンダルになります。だからそれを心配して外科部長が、そのなる前にそのノートを回収しろって…

寛子 それであんたがその役を買って出たわけ？

丸橋 ……ハイ。

寛子 何が書いてあるの？

丸橋 ……それは……すいません……それだけは言えません。

寛子 医局長のスキヤンダルに繋がるような内容なのね。

丸橋 はい……

寛子 外科部長に頼まれたって言ったわね。

丸橋 ……はい。

寛子 あんたおかしいと思わないの。外科部長っていえば、医局長に次に院長の椅子に

近い男よ。どうしてライバルのスキヤンダルの心配なんかするの？

丸橋 ……病院の不名誉になることだからって……

寛子 あんた、それ本気で信じてるの？ ああ、権力亡者のチビハゲが、本気で病院の名

誉の心配をしてるって？

丸橋 ……

寛子 興信所まで使ってそのノートを手に入れて、そのまま焼却炉に投げ込むとでも

思ってるの？

丸橋 ……。(一言もない)

寛子 丸橋くん、あんた、あたしの一番嫌いな、権力争いに足突っ込んだわね。

丸橋 ……

寛子 甘いこと言われたんでしょ。見返りは何？ お金？ 出世？

丸橋 ……。(悄然と立ち尽くすのみ)

寛子 ……まあいいわ。あたしがここでギャーギャー言っても始まらないものね。

丸橋 ……殴らないんですか。

寛子 あたしが殴るのはあたしが好きな相手だけよ。

丸橋 ……。(どんなパンチより痛い一言)

寛子 あたしはね、丸橋くん、誰が院長になるつとどうでもいいわ。まあ、個人的にはチビハゲより医局長の方がマシって思うけど、それもどうでもいいの。この仕事が好きでやってるだけだから。やりにくくなったらよそへ行くだけよ。医者に必要なのは、結局のところ患者だけなのよ。あたしが祖父から教わったことって、たったそれだけ……あなたにはまだわからないかもしれないけど……

丸橋 ……

寛子 協力はここまでよ。あなたはあなたの判断で、好きなようになさい。でもその前

にあたしを上に乗れて戻ってちょうだい。

丸橋 (じつと考えているが、何かを決心しよう) わかりました……

寛子 いきましょう……そうだ、理江のことすっかり忘れてた。恐怖のあまり失神してるか

もしれないわ……早く戻らなきゃ……

二人、歩き出す。

丸橋、ピタリととまる

丸橋 ……

寛子 どうしたのよ。

丸橋 ……

寛子 丸橋くん？

丸橋 ……

丸橋、スタスタと逆の方向へ。
寛子、ついていく。

丸橋 …(首をかしげている)

寛子 ちよつと、どつしたのよ。何してんの？

丸橋 …。

寛子 だから、照れないの。何よ？

丸橋 …。

寛子 まさか…迷ったの？

丸橋 その、まさかです。

寛子 当たり？ やった。…どーすんのよ！

丸橋 どーしましょ。

寛子 階段は？ どっから降りてきたの、あたしたち。

丸橋 …こつち、…イヤ、こつちかな…？

寛子 どつち！

丸橋 どつちかなあ…。

寛子 ちよつとお、こんなところで遭難するなんて、シャレになんないわよ。とにかく階段を探しましょう。

丸橋 は、はい。

あちこち探す二人。

丸橋 あ。

寛子 あった？

丸橋 階段…が。

寛子 エライ、丸橋、どこどこ？

丸橋の後ろから覗き込む。

寛子 …。

丸橋 …。

寛子信じらんない。なんでまた下りなの…。

丸橋 どうします？

寛子 なんかどんだん深みにはまっていくような気がするわ…。

丸橋 降りてみますか？

寛子 あんた、離れないでよ。

丸橋 はい。

寛子 毒をくらはば…ってやつね。

丸橋 (うなづいて) そういえば僕の友達にクワバラってやつがいました。

寛子 関係ない。

丸橋 だから殴ってから言わないで…。

とか言いながら、二人退場。

8 記憶／中村くんの手紙

中村、深雪、理江登場。

中村 なんだか、不気味なところですね。

深雪 へえー、ホントに地下があつたのね…。

中村 ずいぶん入り組んでますね、迷いそうだな…。

深雪 ねえ、あんたホントに覚えてないの？

理江 …え。

深雪 あんたまだ呆然としてんの？

理江 …。

深雪 しっかりして。…ホラ、あんたもなんとか言つて。

中村 え…えーと…ファイトオ。

理江 なんか大事なことを忘れてる気がする…。

深雪 大事なことつて？

中村 くそ、無視か。

理江 …。

深雪 あ、わかつた、さつき言つてたわね、あんたの他にも誰かいたつて…。

理江 え…。

深雪 くまさんがどうとかつて、わかんないこと言つてたじゃない。それ、中村くん

じゃないの、もしかして。

中村 なんのことですか？

理江 違うわ、声が違うし…ねえ、お母さんと一緒にいた人つて、どんな人だったの？

中村 うーん、近くで見たわけじゃないから、でも、そう、なんかカン高い、ヘンな声でした。

理江 じゃあ、違うわ…私の聞いたのは、低くて恐い声だったもん。

深雪 何よなによ、じゃあ、ここには、あたしたちと三人と…。

中村 広中さんのお母さんと

深雪 お母さんと一緒にいた黒装束の男と

理江 輪唱の主。

深雪 六人いるつてこと？

中村 そのうち正体不明なのが、二人、ですか。

理江 …三人よ。

中村・深雪 …。

理江、黙つて中村を指す。

中村 慎重派なんですね。

深雪 だから大叔父さんだつて言つたじゃない、あなたの。

理江 そんなの、ハイそうですかつて言つて信用できるわけないでしょ！

中村 ごもつともです。

理江 証拠あるの？

中村 イヤ、証拠つて言われても…。

理江　なんでひいおじいちゃんの子どもがあたしと同じ歳なのよ。ゼンゼンおかしいわよ。

中村　イヤ、いつこ上ですけど。

理江　あたしだって今年十八になるのよ！

中村　…。おめでとうございます。

理江　大きなお世話よ。

中村　あのー、おじいさんはサバラザリピージャに行ったことはありませんか？

理江　はあ？

中村　僕の母親がまだ独身のころにですね、サバラザリピージャにおりまして…

深雪　それ、なに？

中村　中東のほうの小さな国です。ほとんど砂漠なんです。そこですね、たまたま医療機関の指導のために日本から来ていた偉いお医者さんと母は知り合いました…

深雪　それが漆原…

中村　だったそうです。

深雪　あんた、じゃあ…その、バラバラ…

中村　サバラザリピージャ。

深雪　生まれなの？

中村　ハイ。

深雪　なんか…コメントのしようがないわ…

中村　なんか、一夜の恋っていうか…そういうことらしいんですけど…

理江　やめてよ、気持ち悪い。

中村　気持ち悪いってことないでしょ、おじいさんだって人間だったんですから…

深雪　お母さんはどうしてそんな国にいたわけ？

中村　えー…つまり、油田です。

深雪　は。

中村　油田を掘り当てて、一山当てようといっ…

深雪　なんか凄い話になってきたわね。

中村　まあ、それが失敗して、僕を連れて日本に帰ってきて、今度は石炭を掘り当てて一山当てようと、あちこちの山々を渡り歩きました。…それで、今の父と知り合っただんです。

深雪　山で？

中村　山で、です。父は父で、温泉を掘り当てて一山当てようと山から山へ…

深雪　何かみんな山にとりつかれてない？

中村　まあ、夢見がちな人たちですから…。それで意気投合した二人は結婚しました。

深雪　ふーん…。なんか、ちょっといい話っぽいわね。

理江　だって結局夜逃げで一家バラバラになっちゃったんじゃないよ。

中村　そうなんですよね。やっぱり、現実感覚っていうのは大事ですよ。夢もいいですけど。

理江　どうして夜逃げするようなことになったのよ。

中村　…。まあ、想像はつくでしょうけど、借金です。

深雪　…でしようねえ。

理江　どのくらいよ。

中村 ……
理江 どのくらい借金なのよ。

中村 ……僕、さっき、夜中にコンビニで買い物するって言ったでしょ？

理江 それがなによ。

中村 ちよつと、恐いんですよ。実は…

深雪 恐いつて？

中村 ここも、突き止められるんじゃないかと思って…だからあんまり出歩きたくないんです。

深雪 誰に？

中村 それは、やっぱり、恐い人ですよ。…つまり、そういう借金です。

理江 つまりどういふことよ。

中村 命が危なくなるくらい借金ってことですが…まあ、額で言えば億の単位でしょうけど、くわしいことは知りません…。とにかく、やっきになって探してる人たちがいることは確かですね…。

深雪 だって、それは、お父さんたちを探しているわけでしょ。

中村 両親をさがして、見つからなかったら、あなたならどうします？

深雪 ……息子をさがし出して、そこから…ってこと？

中村 そう考えませんか、普通。

深雪 じゃあそれもしくはして、さっきの輪唱の…

中村 可能性はありますよね…。

深雪 大変ねえ。

理江 とんだ迷惑だわよ。

深雪 ちよつと理江ちゃん。そんな言い方ないと思うわよ。

理江 ……

深雪 中村くんの気持ち考えなさいよ。本当のお父さんに会えるはずだったのに、もう亡くなってたなんて。そついつふつに考えたことある？

理江 ……

中村 そつなんですよね…。もう、この世にいないんですよ。

深雪 あ、ごめん。

中村 あ、いいんですよ。仕方ないですから…。でも…。

深雪 でも、なに？

中村 手紙、どうするかな…。(ポケットから出す)

深雪 手紙って…あ、そうか。

中村 漆原さんに見せろって言われてたんですけど…

深雪 中見てないんだ。

中村 ええ。

深雪 どうする？ 開けちゃってもいいんじゃない？

中村 そつですよね。…もついいですよね。

中村、手紙を開封する。
小さな紙片が出てくる。

中村 「…この子をよろしくお願ひします。十三年前にお預けしたものの扱いは、お任せいたします。鍵を同封いたしますので。…道江」。

深雪 道江って…
中村 母親です。

封筒の中から、小さな鍵が出てくる。

中村 何の鍵だろう…。

理江 …。見せて。

中村 …。(渡す)

理江 …。見たことある。

中村 …。

深雪 …。

理江 あたし、これ知ってる。

深雪 理江…。

理江 あたし、何か大事なことを忘れてる…。とても大事なこと…。

じつと考え込む理江。

それを見守る中村、深雪。

舞台奥。夏目がそっと登場。

夏目 …ンンン(咳払い)

三人、凍りつく。

夏目 その鍵、こつちへ、渡してもらえると助かるんだけどねえ…。

三人、動けない。

夏目、近寄る。

夏目 …まあ、悪いようにはしないから…

理江 …何してんの、逃げるのよ!

夏目 あ、ちょっと…

理江 早く!

三人、バタバタと退場。

夏目、ポツンと残る。

夏目 …えー…参ったねこりゃ…。

夏目、中村が落としていった手紙を拾って、目を通す。

ペンライトをがさして、三人の去ったほうに手探りで進む。

夏目 …ったく、忍者屋敷かつちゅうの…

夏目退場。

9 丸橋くんの告白

丸橋、寛子登場。

寛子 まったく、忍者屋敷じゃないんだから…。

丸橋 えーと、地下三階ですか…

寛子 なんて地上が平屋で地下が三階もあんのよ。二、二にすればいいじゃないの。

丸橋 あ、そうですよね。

寛子 そんなところで感心してないで、あなた、さっさと秘密のノート探したら？

丸橋 いいんですか？

寛子 なにがよ。

丸橋 …。

寛子 あんたノートを探してきたんでしょ？ あたしがどう言おうと、自分の決めたことを思った通りにやればいいじゃないの。なにウジウジしてんの、あんたらしくもない。

丸橋 ハイ。

寛子 …まだ、パンクバンドやってんの？

丸橋 ハイ、ときどき。

寛子 あんたがさ、インターン時代もそうだったけど、ウチに来てから、ずっとそのアタマでしょ？…マア病院中から非難轟々だったじゃない。

丸橋 かばってくれたのは寛子先生だけでした。

寛子 別にかばっちゃいけないわよ。たださ、あんなにまわりからバカだのチョンだの言われながら、不器用にそのアタマで通ってくるアンタ見てたら、なんて言つの…ちよつと共感したのよ。

丸橋 うれしかったです。寛子先生が、仕事ができればそれでいいじゃないって、みんなの前で言ってくれた時…

寛子 できないけどね。

丸橋 …言われると思いましたが、今。

寛子 でも、まあ、人並みにはなつたわよ。

丸橋 …。

寛子 どうしたの？

丸橋 広中先生。

寛子 なによ。

丸橋 …。

寛子 ちよつと、なに？…やだな、そんなマジな顔して…

丸橋 理由があるんです。

寛子 はあ？

丸橋 広中先生がこういう権力争いみたいなのを大嫌いなのは知ってました。でも…

寛子 もういいわよ…そんなこと。

丸橋 聞いてください！

寛子 ハイ。

丸橋 最初は出せなんか、どうでもいいと思ってました。僕もこの仕事好きだし、寛子先生の言うこと、よくわかるんです。患者さえいれば医者にはそれがすべてだつて。

寛子 ……そうね、あたしも、あなたはそういうタイプだと思ってたわ。

丸橋 でもどうしても出せしなきゃいけない理由ができたんです。それで外科部長に声をかけられたときに…つい、受けてしまつて…

寛子 その、理由ってなに？

丸橋 ……

寛子 ……。出世してどうするの？

丸橋 出世して、もっと、偉くなって、寛子先生に、正式に…

寛子 待つて。

丸橋 言わせてください。僕、ずっと寛子先生の

寛子 待つてって言つてるでしょ！

小さな懐中電灯の光が見える

寛子 ……誰かくるわ。

丸橋 電気を消して！

丸橋、寛子の懐中電灯も取り上げて消す。

寛子 な、なによ。

丸橋 隠れて！

寛子 どういふこと…

丸橋 いいから！

ペンライトをかざした夏目登場。

あちこち見ているが、やがて通り過ぎる。

寛子、丸橋、隠れた場所から出てくる。

寛子 あれつて、たしか、朝非新聞…。

丸橋 知ってるんですか？

寛子 今朝、ウチにきたのよ。新聞の取材だつて…。なんか胡散臭いとおもつてたんだけど…。

丸橋 たぶん、それ偽者ですよ。

寛子 じゃあ何者よ…？

丸橋 わかりません、でも、たぶん医局長側に雇われた奴じゃないかと思つんです。

寛子 はあ…証拠隠滅つてわけ？

丸橋 ええ。

寛子 冗談じゃないわよまったく…なんでみんな勝手に人んちに入りますんのよ。

丸橋 仕方ないですよ、次期院長の座を左右するノートがここにあるんだから。

寛子 それよ。どうしてそんなものが、この家にあんのよ。

丸橋 ……。それは…漆原先生が…

寛子 漆原はどう関係してるの？ それがわかんないわ。

丸橋 ……

寛子 あんた、こつなつたら全部言っちゃいなさいよ。

丸橋 ……実は
寛子 実は？

丸橋 誰にも言わないでくださいよ。

寛子 言わないわよ。

丸橋 ……ホモなんです。

寛子 はあ？

丸橋 医局長、ホモなんです。だからあの歳でもまだ独身で…なんか、筋金入りらしいです。

寛子 ああ、知ってるわよ。

丸橋 えっ。

寛子 あんた、それ、すごく有名な話よ。

丸橋 え、そんな。

寛子 あんた、あたしに輪をかけて疎いのねえ。ウチの病院の三大伝説のひとつじゃないの。

丸橋 ……。

寛子 そんなことよりそのノートの中身よ。

丸橋 ……医局長の、日記らしいです。昔の…。

寛子 ホモの日記？ それはマア、あんまり表に出したくないわねえ。でも、それがなんでここにあるわけ？

丸橋 ……交換日記、なんです。

寛子 はあ？

丸橋 その、いわゆる、うー、そういう、男同志の、えー

寛子 ……(唾然)ホモの交換日記…？

丸橋 (うなづく)こわいッス。

寛子 ……ちよっと、まさか…

丸橋 (うなづく)その、まさかッス。

寛子 その相手がうちのおじいちゃんだって言うの？

丸橋 (ただうなづく)だ、そうです…。

寛子 ……(絶句している)…ええ？

丸橋 だから、だからとりあえず、さっきの男より先にノートを見つけてみましょう。ね？

寛子 ……おじいちゃんが？

丸橋 いきましょう！ レッソゴー！ ね？ ね？

丸橋、寛子を引っ張っていく。

寛子 (呆然としたまま引っぱられていく)…ええええ…。ええええ…？

丸橋、夏目の消えた方へと進む。
二人退場。

10 金庫／走れ丸橋くん

理江、深雪、中村、走って登場。
息が荒い。
三人とも座り込む。

深雪 だいじょうぶ？

中村 ええ、なんとか…。

深雪 あいつ、やっぱり、中村くんを狙ってたのかな…。

中村 わかりませんが…。

深雪 (見回して) これってさあ、言いたくないけど…。

中村 …完全に迷いましたね。

深雪 かわりに言ってくれてありがとう。

中村 どうしましょう。

深雪 やたらうるうるすると、またあいつに会っちゃうかも…

中村 そうですね…。

深雪 理江ちゃん、だいじょうぶ？

理江 …。

深雪 …理江ちゃんてば！…さっきからなんか変よ。

理江 …(じつと鍵をみている)

中村 そういえば、その鍵に見覚えがあるって言っていましたよね。

理江 …ええ。

中村 本当に？

理江 確かよ。確かに…どこかで…

中村 でも、あの手紙によると、あ、落としてきちゃった…

深雪 どこに？ さっきのどこ？

中村 まいっか…だからあの手紙のよると、たぶん、その鍵、僕の母親が十三年間持ってたものなわけですよ…。

深雪 そうよね…。

中村 母が、十三年前に漆原さんに何かを預けて…

深雪 その預けたものの、鍵ってこと？

中村 十三年前って言えば…母親が日本へ帰ってきて、父と会った頃です。

深雪 ふうん…待って、十三年前って言えば…

理江 あたしがこの家に一年間だけ住んでた、その年よ。

深雪・中村 …。

理江 あたし、ここにきたことがある。

深雪 …ここって、ここ？

理江 …そう、ここ…おじいちゃん…おじいちゃんの背中…覚えてる、あたしは…

左手でおじいちゃんの手を、握って…それから…右手に…

深雪 その鍵を持ってたのね…？

理江 …わからない…思い出せないわ…

深雪 それから…それからどうなったの？

理江 …こっち…

理江 …こっち…

深雪 え。
理江 こっちに、歩いて…

理江、歩き出す。

深雪 理江ちゃん！

理江、そのまま歩いていく

深雪 理江ちゃん、どこいくのよ！

理江 こっちよ。覚えてる、この道…

理江、退場。

深雪 どうしよう。行っちゃった。

中村 ついていきましよう。きっと何かあるんですよ。…早く！

中村、深雪、理江を追って退場。
夏目、登場。

夏目 まったく、あのガキンチョどもは…どこいきやがった…

夏目、退場。

丸橋、寛子登場。

丸橋 あれえ…ここ、さつきも来ませんでした？

寛子 …おじいちゃんが…ええええ？

丸橋 寛子先生、意外とショックからの立ち直りが遅いですね…。

二人退場。

理江、登場。

理江 …こっち、こっちだわ…！

理江退場。

ほぼ同時に中村、深雪登場。

深雪 どっち行っった？

中村 …。(こっちでしよう)

二人、退場。
丸橋、登場。

丸橋 …あれえ、ここも確かさつき…あれ、寛子先生？…寛子先生！…あちゃあ、はぐれちゃったよ…まずいなあ……寛子センサー…寛子さん…(迷っているが、思いきって)寛子オーツ！…へへへ(照れる)…照れてる場合じゃないよな…。寛子先生…！

丸橋、退場。

寛子、登場。

寛子 …おじいちゃんが…おじいちゃんが…(ホモ、の口だけ)…まてよ…じゃあなんで父さんが生まれたのよ…そうよ、何かの間違いだわ…そう…そうよね丸橋くん…丸橋くん？…(ひとりになっていることに気づく)あれ…ちょっと丸橋くん？…あれえ…。

寛子、退場。
小暗転。
暗転明け。
夏目が、小さな金庫のよつなものの上に座っている。
そこへ丸橋登場。

丸橋 あつ。

夏目 へ？

丸橋 貴様、その金庫。

夏目 あんた誰よ。

丸橋 その金庫をこっち渡せ！

夏目 なんでエ？

丸橋 なんでエって、それはおまえ、…とにかく渡せ！

夏目 渡してもいいけど、鍵ないぜ。あんた鍵持ってるのかい？

丸橋 鍵？

夏目 そう。鍵。持っていないだろ？ だから俺もここで待ってるの。いつしよに待つ？

丸橋 待つって、誰を？

夏目 これの持ち主に決まってんじゃない。

丸橋 持ち主だあ？ あんたなに言ってるんだ？ そいつの持ち主は死んじゃってんだよ。

肝硬変で大往生。

夏目 あらまあ、おバカちゃんねえ。

丸橋 なんだとオ。

夏目 死んだ人の持ち物つてのはね、ちゃあんと行く場所があんのよ。たとえばそいつ

の息子、娘…

丸橋 漆原先生はな、奥さんも一人息子も亡くなって、孫の寛子先生がいるだけだ。寛

子先生はそんな金庫のことなんて知らなかったんだ。

夏目 …ふうん。ま、いいや、じきにわかるよ。ま、座ったらどうだい。

丸橋 そんなヒマはないんだよ、いいからその金庫渡せ！

夏目 だから、鍵がないんだよ、あんたもわかんない人だね…。

丸橋 なくつてもいいんだ、金庫ごと海にでもほうり込んでやる。

夏目 あらま。

丸橋 あんたらだつてその方が手間が省けるだろ！

夏目 …あんた、こん中になが入つてると思ってたんだ？

丸橋 とぼけるな。いいからよこせ！

丸橋、夏目に飛びかかるつとする。

夏目 動くな。

夏目、スーツのポケットに突っ込んだ手を、丸橋に向ける。
丸橋、フリーズする。

夏目 動くなよ。…じつとしてろ。

そこへ、理江、ひとりで登場。

理江 ここだわ、ここ覚えてる…あ。

夏目 あ。

夏目のスキを突いて、飛びかかる丸橋。

丸橋 うりやあ！

夏目 あ、ちよっと…

スキを衝かれて転倒する夏目。
金庫を持って走る丸橋。

夏目 あ、ちよっと…待ちなさいって…

丸橋、走って退場。

夏目 あちゃあ…。まいったな…。

理江 なにごとなの？ あなた誰？

夏目 さっきは脅かして悪かった。何もしないよ。大丈夫。

理江 あなた、やっぱり中村くんを探しにきたの？

夏目 ま、そんなとこかな…。

理江 ……どうして鍵のこと知ってるの？

夏目 まあ、いろいろと、ね。

理江 あの金庫、何が入ってるの？

夏目 ……金庫の中には大事なものをしまっって、昔から相場が決まってるんだよ。

理江 ……。大事なもの…。

夏目 そう、大事なもの。ま、なにを大事と思うかは、人それぞれだけどな。

理江 あたし…あの金庫、覚えてる。

夏目 ……。

理江 だんだん、思い出してきたの、この家にいたときのこと。途切れ途切れだけど…
おじいちゃんが、あたしをここに連れてきた…その時、おじいちゃん、この鍵で
金庫を開けてた…

夏目 あ、鍵持ってるのか…やれやれ、鍵が来たと思ったら、金庫がおでかけかよ…

理江 それで、あたし、持っていたものを、金庫にこっぴどやってしまったのよ…なにを
持っていたんだろ…それが…思い出せない…

夏目 簡単じゃないか。

理江 え。

夏目 金庫を開けてみればいいのさ。行こう。あのモーレッツ兄ちゃんが海にたどりつく
まで、まだ間がある。

二人、退場。

深雪、中村、登場。

中村 あんまり言いたくないんですけど…

深雪 見失ったわね。

中村 ありがとうございます。

深雪 もう、あの子ったら自分の家みたいにスイスイ歩いてくんだもん。

中村 昔とった杵柄ですね。

深雪 三つ子の魂百までとも言っわね…。

そこへ、丸橋、金庫を持って、走って登場。

中村 わ。
丸橋 わ。
深雪 なに、誰。
丸橋 君たちは…何？
深雪 ひよつとして、この人、理江ちゃんのお母さんと一緒にいたって…
中村 あ、黒づくめの…そう言えばそんな気も…
深雪 意外と恐くなさそうな人ね…
丸橋 君たち、寛子先生知ってるのか。
深雪 あ、あたし、その先生の娘の幼なじみ。
中村 (重々しく) 叔父です。
丸橋 …何言ってるんだ君たちは…。
中村 やっぱり一般の人には通じにくいですね。
深雪 説明抜きだと無理ね。
丸橋 理江ちゃんて、先生の娘か？…もしかしてさっきの子が…
深雪 おじさん、理江ちゃんに会ったの？ ねえ、どこにいるの？
丸橋 この金庫のあったところで…もう一人男がいて…あちゃあ…置いてきちゃったよ…まずいな…
深雪 男って？
丸橋 胡散臭そうな奴で…ピストルを持って…
深雪 ピストル？
中村 それって…
深雪 そうよきつと、輪唱の男。
丸橋 臨床？
深雪 中村君を狙ってるのよ！
丸橋 中村くんて…
中村 ハイ。
丸橋 あ君か。君狙われてんのか？
中村 ええまあ、そうなんです…あの、その金庫、もしかして…
丸橋 これ？ これは…別に、何でもないよ。
中村 あの鍵はもしかしたらその金庫の…。
深雪 そうよ、きつとそうだわ…！
丸橋 鍵？ 君たちこれの鍵を持つてるのか？
中村 持ってたんですけど…今はないんです。
深雪 理江ちゃんが持つてるのよ。
丸橋 …君たちこの金庫の中に何が入っているか知ってるのか？
中村 イヤ、知らないです。ただ、僕の母親がですね、昔漆原さんに預けたものが入っているらしいんです。
丸橋 …どうももうひとつよくわからないんだけど、たぶんこの金庫の中身はそんなものじゃないと思う…。
中村 じゃあ、なにが入ってるんですか。
丸橋 それは…えー、君たちのような純真な青少年には言えない。
中村 はあ？
丸橋 とにかくこれは僕が処分する。

中村 イヤ、それは困ります。

丸橋 駄目だ。この金庫は開けさせない。

中村 そんな…中を確認するだけでも。

丸橋 第一鍵がないじゃないか。

中村 だからそれは理江さんが…

深雪 やめてえーッ！

中村 あ。

深雪 …やめてッ！（うずくまってしまっ）

丸橋 なんなんだ。

中村 しまった、うっかり水かけ論を展開してしまった。

丸橋 …はあ。

中村 待ちましよう。バタバタ動いても迷うだけですよ。

丸橋 …。

中村 ここまで降りてきてしまったらもう、出口がわかるのは理江さんだけですよ…

記憶さえ戻っていれば…。それに、その男っていうのも、もし僕を探しに来た

んだとすれば、理江さんたちに無茶なことはしないはずですよ。きつとこっちに向

かっていますよ。

丸橋 だからそれが困るんだよ…

寛子の声。

寛子（声） 誰かー、誰かないのー。

丸橋 寛子先生！ ここです！ ここにいますよ！

寛子、登場。

寛子 ああ、やっと人に会えた…

丸橋 大丈夫ですか。

寛子 よかった…なんかこっちの方で叫び声が聞こえたから…

中村 役にたってますね。

深雪 （無言のVサイン）

寛子 なんかしばらく見ないうちに人増えてるわね。

中村 はじめまして、えー、いろいろあって、とりあえず中村といいます。

寛子 は？…中村さんね。

深雪 あたし、理江ちゃんの幼稚園の時の友達で…

寛子 あら。こっちに住んでたときの？

深雪 はい。深雪っていいです。

寛子 そう。はじめまして。あの子がここに住んでた一年は、あたし海外研修でね、一
緒にいてやれなかったのよ。

深雪 はじめまして。

寛子 …。

丸橋 は。

寛子 どうなってるの？

丸橋 それが問題ですね。

中村 理江さんを待ってるんです。

寛子 あの子も降りてきちゃったの？

深雪 ええ。

寛子 あの子、こんなところ三分ともたないわよ…。

中村 それがけっこういけてますよ。

寛子 で、今どこにいるの？

中村 それが問題ですね。

寛子 …。

一同、黙り込む。
暗転（総ハケ）

11 ノート／深雪／解決と未解決

暗転明け。

夏目と理江、登場。

夏目 やれやれ、ここはホントに迷路だなあ…。

理江 戦争…。

夏目 ん？

理江 戦争の時、たくさんの方が助かるように、作られたんです。

夏目 防空壕のオバケってわけか…。どうしてそんなことを？

理江 おじいちゃんが話してくれたの。それを後からおじいちゃんが作りかえた…

夏目 なるほどね…。変わった人だったみたいだね。

理江 でも、やさしかった…。お母さんは、なんか複雑みたいだけど。お母さんの両親

はお母さんが小さい頃に亡くなって、おじいちゃんが親代わりだったから…

夏目 それで君が孫に繰り上がったわけか、ま、誰しも孫には甘くなるもんさね。

理江 あの時も…（足を止める）

夏目 …。

理江 私、泣いてた…。そう、それでおじいちゃんが、ここに連れてきてくれて…私、

どうして泣いてたんだろう…何か…悲しいこと…とても悲しいことがあって…

夏目 それも、金庫を開ければ思い出すさ…。行こう。

夏目、先に立って退場。

理江、ついていきかけて、ふと、足を止める。

理江 …。

闇の中を振りかえる。

理江 …誰…？

深雪、登場する。

理江 深雪ちゃん…。

深雪 理江ちゃん。もうあんまり時間ないから、ふたりきりで会いたかったの…

理江 …え。

深雪 思い出した？

理江 …私…

深雪 思い出して、あの頃のこと。

理江 私、そう…もう少しで…思い出せるわ…あの時、どうして泣いてたのか…あの

時、金庫の中に何をしまったのか…

深雪 そう、よかった…。それでね、ふたりきりで会いたかったのはこの、ノートの

こと…

理江 それ、なに？

深雪 これ、あなたのおじいちゃんのものなんだけど、みんながこれを探してるの。別

にやましいものじゃないのよ。これを読むと、理江ちゃんのおじいちゃんが、とても純粋な人だったってわかるわ。

理江 …。
 深雪 でもね、たぶんあなたのおじいちゃんは、これを誰にも見せたくないと思う。理解されないと思う。だから、もし理江ちゃんさえよかったら、これはもとの場所に返しておくわ。そこならたぶん誰にも見つからないから。

理江 …。

深雪 いい？

理江 …うん。

深雪 そう。じゃあ、そうする。

理江 深雪ちゃん、時間がないって、どういって…？

深雪 それはもうすぐわかるわ。

理江 深雪ちゃん…。ミーちゃん…！

深雪、すっ、と退場。

理江 …。

立ちすくむ理江を残して暗転。

暗転明け。

金庫のある場所。先ほどと同じに、深雪、中村、丸橋、寛子がいる。
 そこへ、夏目、理江、登場。

夏目 お集まりですなあ、皆さん。

一同、振りかえる。

夏目 お待ちかねの、鍵の御到着です。

寛子 理江！

その瞬間。理江と深雪以外のすべての人物の動きが止まる。

深雪、立ち上がる。

理江、金庫に向かって歩く。

理江 そう、この金庫…。おじいちゃんがこの金庫を開けて…そして…私…

深雪、それを見守りながら、ゆっくり歩いている。

理江 私は…泣いていた…悲しくて…そう…あの日…私は…深雪ちゃんの家へ行った…でも深雪ちゃんはいなかった…いつもやさしくて笑ってはかりいた彼女のお母さんが…泣いていた…私も…泣いて…

理江、金庫に鍵を挿し込む。

理江 ミーちゃんと仲直りしようと思っていたのに…それを渡して…ごめんねって…壊しちゃってごめんねって…

理江、金庫を開ける。

古い書類の束の上に、新品のハーモニカが置いてある。
 理江、それを取り上げる。

理江 大事なものは金庫にしまっておこうなって、おじいちゃんが言った…そうすれば…
 いつか金庫を開けるときまで、気持ちをしらべておけるからって…いなくなつて
 しまった友達の思い出もいっしょに…そう…いって、金庫に鍵をかけた……
 深雪ちゃん…！
 深雪 理江ちゃん…ありがと。

深雪、退場。
 理江、振り返る。
 遠くで音楽が聞こえる。
 次の瞬間、人々の動きが戻る。
 丸橋、寛子が金庫に駆け寄る。

丸橋 これ…なんですか？

寛子 よくわからないけど、どうも証券みたい…。

夏目 中村くん、これは君のものだ。全部君の名義になつてる。

中村 僕に…。

夏目 そう。君のお母さんが、漆原博士に託した唯一の財産。お母さんが結婚する
 き、それまでに溜めた財産をすべて、将来有望な企業の株券にした。たいしたも
 んだよ。この有価証券、今では億の価値があるでしょう。

中村 そんな…そんなものがあるなら何も夜逃げしなくても…

夏目 お母さんはね、君の将来を心配していたんだ。例えどんなことがあつても、これ
 だけは手をつけまいと決めていたんだろ。そしてそれを本当の父親である、信
 頼する漆原博士に託した。

寛子 漆原が…父親…ですって。

夏目 そうです。

寛子 じゃあ、この子…私の…えーと、叔父ってわけ！

夏目 そういうことですなあ。

寛子 …やってくれるわ…。

中村 じゃあ、あなたは…。

夏目 君の両親に雇われた探偵だよ。

中村 父と母は…。

夏目 …逮捕されたよ。

中村 …。

夏目 詐欺罪その他で起訴される。まあ、逃れようがないだろう、気の毒だが…。獄中
 で漆原博士の死を知ったお母さんは、私を雇った。息子の利益を確保してくれる
 ようにとね。

中村 じゃあ、僕はもつ…

夏目 そうそう、君を狙つてる男がいてねえ…。そいつをマークしていたんだ…ここ
 の屋敷をかぎつけるところまでいった…まあ、世の中どこに不幸があるかって
 るかわからないもんだね…この屋敷へいざ乗り込もうと車を飛ばしているときに、
 ブレーキの故障でね…お陀仏さ。

中村 …。

夏目 こいつは最初から君のだから、使い方は君次第だ。…こ両親は、罪の償いして、新たにやり直したい気持ちだそう。君がこれを、自分自身のために使ってくれることを望んでる。それが君への伝言だ。そして俺の仕事はこれでおしまい。どうも皆さんご苦労さまでした。

丸橋 ちよつと待て。まだノートが…。

寛子 丸橋くん。もういいわよ。

丸橋 でもですね…。

寛子 この家のどこかにあるんなら、もうそれでいいじゃない。この調子じゃ誰にも見つからないわよ。

丸橋 でも万…

寛子 大丈夫よ。…それともあんた、外科部長に義理立てしてんの…。

丸橋 いえ、ノートが見つかったら、誰にも見せずに処分するつもりでしたから…

寛子 …ありがと。その気持ちだけで充分よ。…でもチビハゲは納得しないか。

丸橋 僕、見つけて燃やしたって報告します。これでスキャンダルのもとは無くなりましたって。

寛子 あいつ、湯気立てて悔しがるわよ。

丸橋 ですね…。

寛子 それじゃ、解決ってことね。ここから出ましよう。

丸橋 僕、出口探してきます！

寛子 頼むわ。

丸橋、退場。

寛子 どうしたの、理江。

理江 深雪ちゃん…

寛子 え？

理江 深雪ちゃんのこと？

寛子 深雪ちゃんて…？

理江 今、ここにいたじゃない。

寛子 ここに？ 誰かいた？

夏目 いいや。

中村 誰も。

理江 ちよつと、だつて…ずっと一緒にいたじゃない！

中村 ずっと理江さんと一緒でしたけど。

理江 あたしじゃなくて深雪ちゃんよ！…三人で一緒に降りてきて、だつて…

中村 ずっと二人でしたよ。

理江 嘘つかないでよ！

寛子 理江、どうしたの…。

理江 覚えてないの…？

寛子 理江、あんた幻でも見たんじゃないの？

中村 そつですよ。

理江 …。

寛子 理江。

理江 …。

寛子 大丈夫？

理江 ……うん……平気……もうやめるわ……水かけ論だもんね……

丸橋、戻ってくる。

丸橋 寛子先生。ありました。階段がありましたよ！

寛子 ……どっち？ 登り？……下り？

丸橋 登りです！

一同、ホッと安心する。

寛子 そう。とにかく、上に上がりましょう。いい加減で太陽の光が見たいわ。

丸橋 行きましょう。

寛子 さっきの続きも聞きたいしね……

丸橋 ……は？ さっきのって……？

寛子 ああ、いいのいいの、なんでもない。

丸橋 ……あ(ようやく気づく)

寛子 ……なによ、いいのよも……

丸橋 ……(まじまじと寛子を見ている)

寛子 だからいいのよ、聞き流しなさいよ……ぶつわよ！

丸橋 どうしてぶつてから言っんですか。

寛子 行くわよ！ ホラ、ええと……

中村 中村です。

寛子 中村くんも。行きましょ！

丸橋を先頭に、中村、寛子、退場

寛子 ……理江、どうしたの。行くわよ。

理江、その場を動かない。

寛子 理江ったら。

理江 うん……

理江、歩きかけ、ひとり残る。

理江 深雪ちゃん……バイバイ。

ゆっくり暗転。

12 エピローグ／もうひとつ別の朝

ゆっくり明かり入る。
理江がひとり、座っている。

理江 …… 結局、おじいちゃんの家は売らずにすみしました。中村くんが、おじいちゃんが一番近い親族として家を相続して、税金を例の株券で払ったのです。法律的ないろいろなことは、夏目さんがうまくやってくれました。そして私たち親子は、このおじいちゃんの家に戻って越してきました。

理江 あのノートは、結局あれつきり見つかりませんでした。病院の院長は、ナントカっていう人がなったみたいですけど、私には興味がないので知りません。… 本当は、あのノートがどこにあるのか、私は知っています。でもそれは私と深雪ちゃんだけの秘密です。深雪ちゃんのことには、やっぱり誰も覚えていません。でも、私は、あれは幻じゃなかったと今でも思っています。

理江 お母さんは相変わらず、張り切って毎日歌って踊って、御飯を作って、そして仕事に行っています。丸橋さんのことは、まだ丸橋さんと呼べませんが、そのうち、いつの間にか、自分でも気がつかないうちに、お父さんと呼んでいるんじゃないかって、そんなふうに思います。きっとそのうち。中村くんは、家庭の事情で通えなかった高校に入り直すために、勉強しています。大叔父さんと呼ぶのは面倒なので、やっぱり中村くんです。時々意地悪してオジさんと呼ぶと、彼はとてもイヤがります。

理江 おじいちゃんのことには、私もお母さんも、結局よくわかりません。でも今まで抱いていたおじいちゃんのイメージは、少しだけ変わったような気がします。でも私もお母さんも、あまり深く考えないようにしています。無理に理解しようとするより、このおじいちゃんの家に住んで、少しの間でも、おじいちゃんが吸っていた空気を吸うことのほうが、意味があるような気がしています。

理江 おじいちゃんの家は、みんなで住んでもまだまだ広くて、今でもときどき迷ってしまいます。いろんなことが変わったように、でも実は何も変わってないような、不思議な気がします。きっと本当は、いろんなことが全部、毎日少しずつ、少しずつ、変わっていくのだと思います。でもそれは、もう少し時が過ぎてみるまで、わかりません。私にわかるのは、お母さんが、丸橋さんとふたりでこの家で開業医を開くという新しい夢のために、前よりもいっそうバリバリ働くようになったこと。中村くんは、悔しいことに、あたしより料理がうまいということ、そして…

理江 …… そして私は、以前よりも少しだけ、寝起きがよくなりました…。

明るくなる。

寛子、出勤前のバタバタした感じで登場。

丸橋、ネクタイを締めながら同じく急いで登場。

中村、眠そうにしながら、エプロン締めつつ登場。

朝の風景。

理江、立ち上がってそこに加わる。

暗転。
幕。